

マタギ文化を垣間見ることで「野生動物たちとの共生や、生命をいただくことの意味を考えさせられる」ことがあります。

「自然に生かされている感覚を大切にすマタギの精神から、地域再生のヒント」がありはしないかと。

猟友会などをはじめとする狩猟を行うグループと、マタギとは異なるものであろうが、その精神には共通するものも多いと思われます。

近年、農作物を荒らすイノシシ被害に苦慮している地域は全国的にも多いと聞きます。岡山県吉備中央町でも例外ではなく、狩猟資格者の減少になんとか歯止めをかけようという動きさえあります。

国内各地には捕獲した害獣を解体する施設がしだいに拡充し、肉は『ジビエ』として商品化されているようです。

しかしながら、ほとんどの地域でその皮は廃棄の対象となっているのが現状です。

ここ岡山県吉備中央町では、平成 24 年からイノシシの皮を利用できないかという考えのもと調査研究、商品開発などに取り組むプロジェクトが発足しました。

自然に生かされている人びとが、野生であってもイノシシの生命を大切にいただくにはその全てを無駄にしないマタギの精神にも通ずるものがあるのかもしれない。

自然界の循環に沿って環境に配慮した取り組みは、なにも服や雑貨に限らず幅広いジャンルの業種において積極的に始められています。

このプロジェクトではおよそ 2 年かけて、研究調査が行われ、環境にやさしいとされるラセッターなめしの現場などにも視察に行きました。

プロトとして何色かの色になめし染色してもらったレザーを初めて手にとって確認したとき、思わず歓声を上げたものです。

そのレザーの色合いや質感が想像していたイメージを超えていた瞬間でした。

商品化にこぎつけられるかは自信があったものの、売れるかどうかは別のもの。

手間ヒマ時間とお金をかけて、他では絶対やらないだろうな……。でもやるしかないって思えば、あとはいいものづくりに徹しよう。

そんな思いで試作、変更を繰り返す日々がやっと実を結びつつあります。

最初に、なめしていくつかの色に染色されたイノシシの皮を前にして、『どんなものに、どのように組み合わせるのがいいのだろう』という議論から始まりました。

そのなかで、エプロンという発想がいちばんに採用されたのです。イノシシから浮かんでくるイメージとなるとやはりメンズを中心としたワイルドなアウトドア派向きのデザインで、ユニークなものを考案しようと試行錯誤してできあがったのが、このサイトの写真にもあるようなエプロンです。

次に、カラー帆布を素材とし、大きめのイノシシレザーのポケットを外側にあしらったトートバッグとミニトートの完成をみました。

これも、持ち手の部分の長さや幅といったグリップの感覚、本体との位置関係については試作品を作っては討論を重ねてきました。

取っ手ベルトを底部に近い位置まで下げることで、デザインの的にも優れ安全面からは耐荷重を上げることができました。

アウトドア向けのエプロンからの延長として、BBQエプロンの発想が生まれました。

両膝の動きを妨げない中央のスリット開き、ドリンク缶や調理器具など思い思いのものを入れることの出来る口の広いポケット、両手を入れるポケットや胸ポケットと、とにかく欲張りにポケットを配置しました。

いよいよ服との組み合わせです。

先にも記述しましたが、やはり『オトコ用を意識した方向』で議論するうち、ハンティングに特化したデザインに絞り込もうという点で一致したのです。

ハンティングタイプのデザインは、ヨーロッパの貴族の間で古くから採用されていたという記録をたどり、たくさんの資料のなかから抜粋したものを基に新しくデザインを起こして、パターン化とグレーディングを繰り返す試作段階に入りました。

こうした取り組みの中から、ハンティングベスト、ハンティングジャケット、ハンティングコートが創りだされたのです。

そして、もう少しミドルエイジにマッチするものはないのかなということを検討していくうちに、高級感のあるウール素材と組み合わせようというプランを選択しました。

それがゲームジャケットと称するテラードタイプでガンパッチとエルボパッチ、それにハンドウォーマの玉縁部分にイノシシレザーを配置したサイドベンツジャケットが完成しました。

服素材にはメルトンのカーキとベージュ、もうひとつはウールヘリンボンのインディゴとブラックを厳選して採用しました。

大人のオトコを強く意識した、完成度の高い唯一無二のジャケット製品となりました。